



国立研究開発法人
水産研究・教育機構

プレスリリース



平成29年4月28日

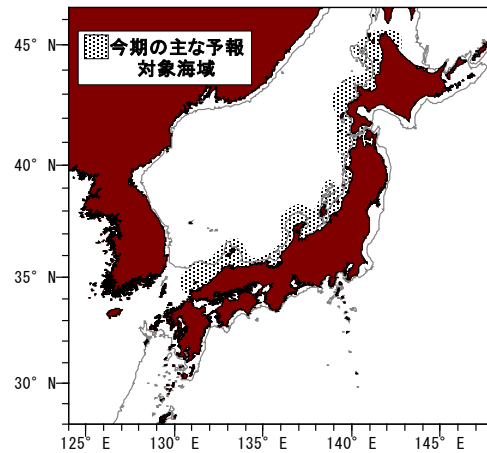
国立研究開発法人 水産研究・教育機構

平成29年度 第1回 日本海スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成29年5月～7月)のポイント

- ・ 来遊量は、不漁であった前年並で近年平均を下回る。
- ・ 漁期の開始時期は、前年および近年平均並。



* 近年は最近5年間(平成24年～平成28年)

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所
担当：業務推進部 加藤、江連
資源管理部 上原、宮原
電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950
当資料のホームページ掲載先URL
<http://abchan.fra.go.jp/>

平成29年度 第1回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2017年5月～7月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海沿岸域

対象漁業：主にいか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群

- (1) 来遊量：不漁であった前年並で近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：漁期の開始時期は前年および近年平均並。

* 近年は最近5年間(2012年～2016年)

I 漁況予報

日本海におけるスルメイカの資源調査結果（2016年10月～11月の日本海スルメイカの幼生分布調査、および2017年4月のスルメイカ新規加入量調査）と海況予報を主要な情報として、今期（2017年5月～7月）の日本海沿岸域におけるスルメイカの漁況を下記のとおり予測した。

【予測】

今期（2017年5月～7月）の日本海沿岸域へのスルメイカ来遊量は、不漁であった前年並で近年平均を下回ると予測される。北陸を中心とした漁期の開始は、前年および近年平均並と予測される。

【情報】

- (1) 2017年4月に実施したスルメイカ新規加入量調査の結果では、今期、漁獲対象になると予測される外套背長5cm以上のスルメイカの1調査点あたりの採集尾数は8.6尾で、前年（5.8尾）を上回ったが、近年平均（21.2尾）を下回った。
- (2) 2016年10月～11月に実施したスルメイカの幼生分布調査では、幼生の分布密度が2015年および過去5年（2011年～2015年）平均を下回った。
- (3) 2016年5月～7月の小型いか釣り等によるスルメイカ（生鮮）の漁獲量は、不漁であった2015年並であった。
- (4) 漁期の開始時期に影響を与える4月中旬～6月の対馬暖流域の表面水温と50m深水温は、共に平年よりも「やや高め」と予測されている。なお、近年の4月～6月の水温も、概ねやや高めで推移している。

II 説明

1. 調査結果

1) 4月におけるスルメイカの分布状況

<目的>

いか釣り漁業では外套背長15cm以上のスルメイカが主な漁獲対象となる。したがって、いか釣り漁業で漁獲される前のスルメイカ（主に外套背長2cm～10cm）の分布状況を事前に把握することで、その後の漁況を予測することが可能になる。そこで、日本海では主漁期前の4月に漁獲加入前のスルメイカの分布状況を把握するために新規加入量調査*1)を実施している。なお、本調査で採集されたスルメイカのうち、外套背長5cm以上のサイズが今期（5月～7月）の漁獲対象になると想定される。

*1) 新規加入量調査：口径10m～12mの表層トロール網を用いた採集調査。各調査定点で3ノットの速度で30分間曳網して実施。

<結果>

2017年の調査結果（図1）では、外套背長5cm以上のスルメイカが採集されたのは主に能登半島北西沖の調査点であった。一方、外套背長5cm未満のスルメイカは主に兵庫県～島根県沖で採集された。

トロール調査を29点で実施した結果、1調査点あたりの平均採集尾数は15.5尾となり、前年（33.3尾）および近年平均（57.9尾）を下回った。また、今期（5月～7月）の漁獲対象になると想定される外套背長5cm以上の平均採集尾数は8.6尾であり、前年（5.8尾）を上回ったが近年平均（21.2尾）を下回った（図2）。

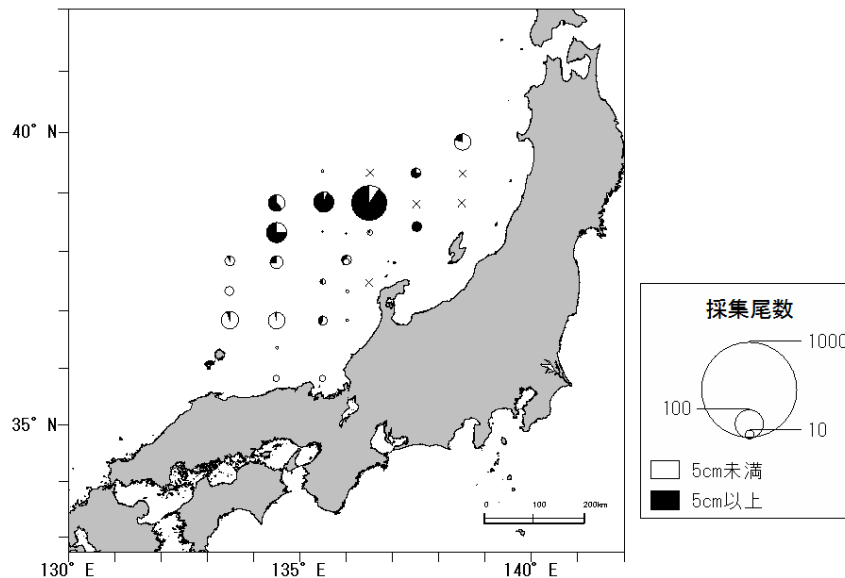


図1 2017年4月のスルメイカの新規加入量調査結果

○の面積は採集尾数、×は採集されなかった調査点

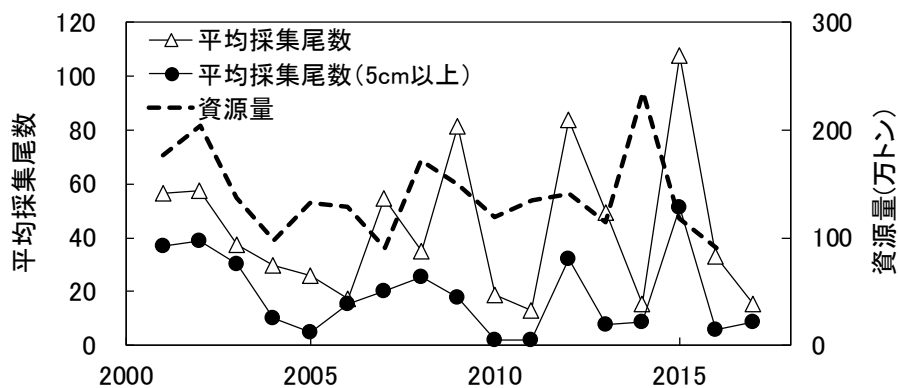


図2 新規加入量調査による平均採集尾数と推定資源量の経年変化

推定資源量は、平成28年度スルメイカ秋季発生系群の資源評価より

2) 前年秋のスルメイカ幼生の分布量

<目的>

5月～10月の日本海では、主に前年の秋～冬に生まれたスルメイカ秋季発生系群が漁獲される。したがって、前年秋～冬のスルメイカ幼生の分布量は、スルメイカ秋季発生系群の親魚量（とり残し量）の指標値になる。そこで、日本海では、10月～11月にスルメイカの幼生分布調査*2)を実施し、前年のとり残し量（確保された親魚量）の把握を行っている。

*2) 幼生分布調査：口径45cmのプランクトンネット（網目合0.33mm）を用いた採集調査。各調査点で深度150mから海面までの鉛直曳によって主に外套背長1～3mmのスルメイカ幼生を採集する。

<結果>

2016年は隠岐諸島から兵庫県沖と対馬海峡付近の海域で幼生が採集された（図3）。1調査点あたりの平均採集尾数は0.13尾であり、2015年の調査結果（0.64尾）および過去5年（2011年～2015年）平均（0.92尾）を下回り、幼生の分布密度が低かった1988年以前並であった（図4）。そのため、2016年の漁期終了後に確保された秋季発生系群の親魚量は2015年および過去5年平均よりも少なかったと判断される。

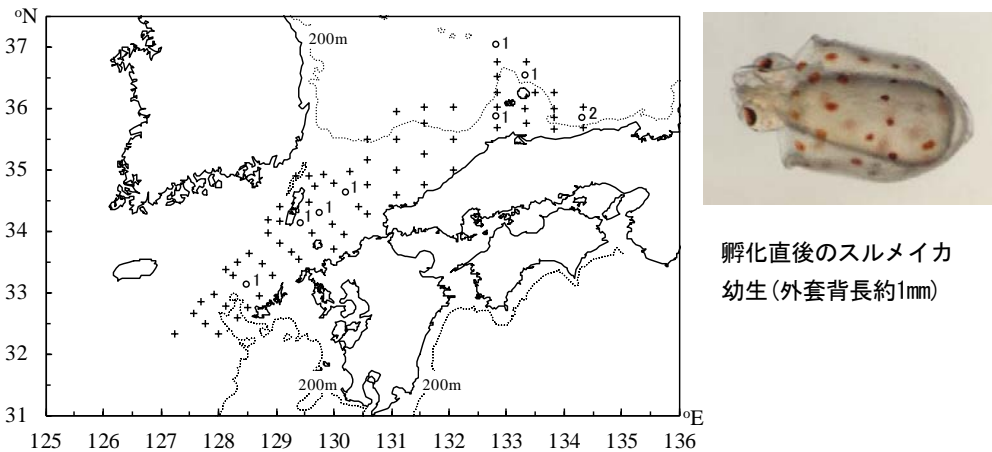


図3 2016年10月～11月におけるスルメイカ幼生の分布調査結果

○は幼生が採集された調査点、+は幼生が採集されなかった調査点、図中の数字は各調査点における採集尾数

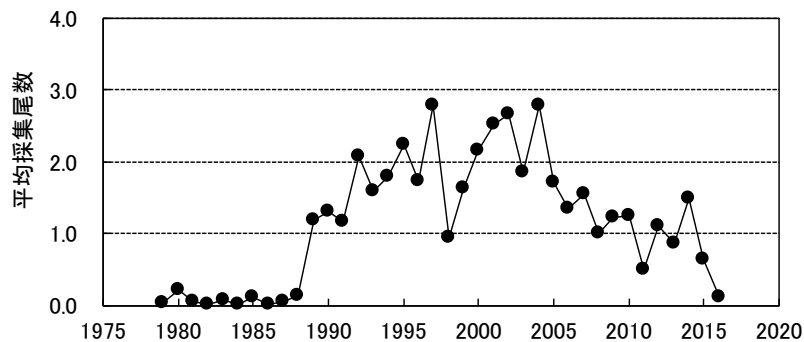


図4 スルメイカ幼生の1調査点あたりの平均採集尾数の経年変化

2. 日本海における海洋環境

スルメイカの分布回遊は水温と深く関連しており、沿岸域の漁期の開始・終了時期は水温に左右される。気象庁の資料*3)によると、2017年4月中旬の日本海における表面水温は、全体として平年並～高めであり、北緯40度付近では高めであった（気象庁の資料における平年は1981年～2010年の平均値）。また、平成29年度第1回日本海海況予報*4)では、対馬暖流域における4月～6月の表面水温および50m深水温は、平年よりもやや高めで経過すると予測されている（日本海海況予報における平年は1976年～2005年の平均値）。近年の4月～6月の水温も概ねやや高めで推移していることから、本州北部以北を中心とする今期のスルメイカ漁期の開始時期は、前年および近年平均並と予測される。

*3) <http://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/shindan/index.html>

*4) <http://abchan.fra.go.jp/gk29/20170405.pdf>

Ⅲ 日本海におけるスルメイカ漁況の経過

日本海では、1月～3月上旬は前年の冬に生まれたスルメイカ（冬季発生系群）が主に漁獲され、3月中旬～4月は前年の春～夏に生まれたスルメイカ、5月以降は前年の秋に生まれたスルメイカ（秋季発生系群）が漁獲の中心となる。

前年の予報対象期間（2016年5月～7月）では、5月～6月の漁獲量は本州北部日本海では過去5年（2011年～2015年）平均を下回り、ほかは過去5年平均並であった（図5）。また、7月は全海域で過去5年平均を下回り、前年の5月～7月の合計漁獲量（主に小型イカ釣り漁業によるスルメイカ（生鮮））は、1994年以降で最も少なかった2015年並であった。前年の8月以降、8月に道北・道央、12月に本州北部日本海でそれぞれ過去5年平均を上回る漁獲があったが、各海域とも年間合計では過去5年平均並か下回る漁獲であった。

2017年1月～3月の漁獲量については、1月に本州北部日本海で前年を上回ったが、全体としては前年および過去5年平均を下回った。

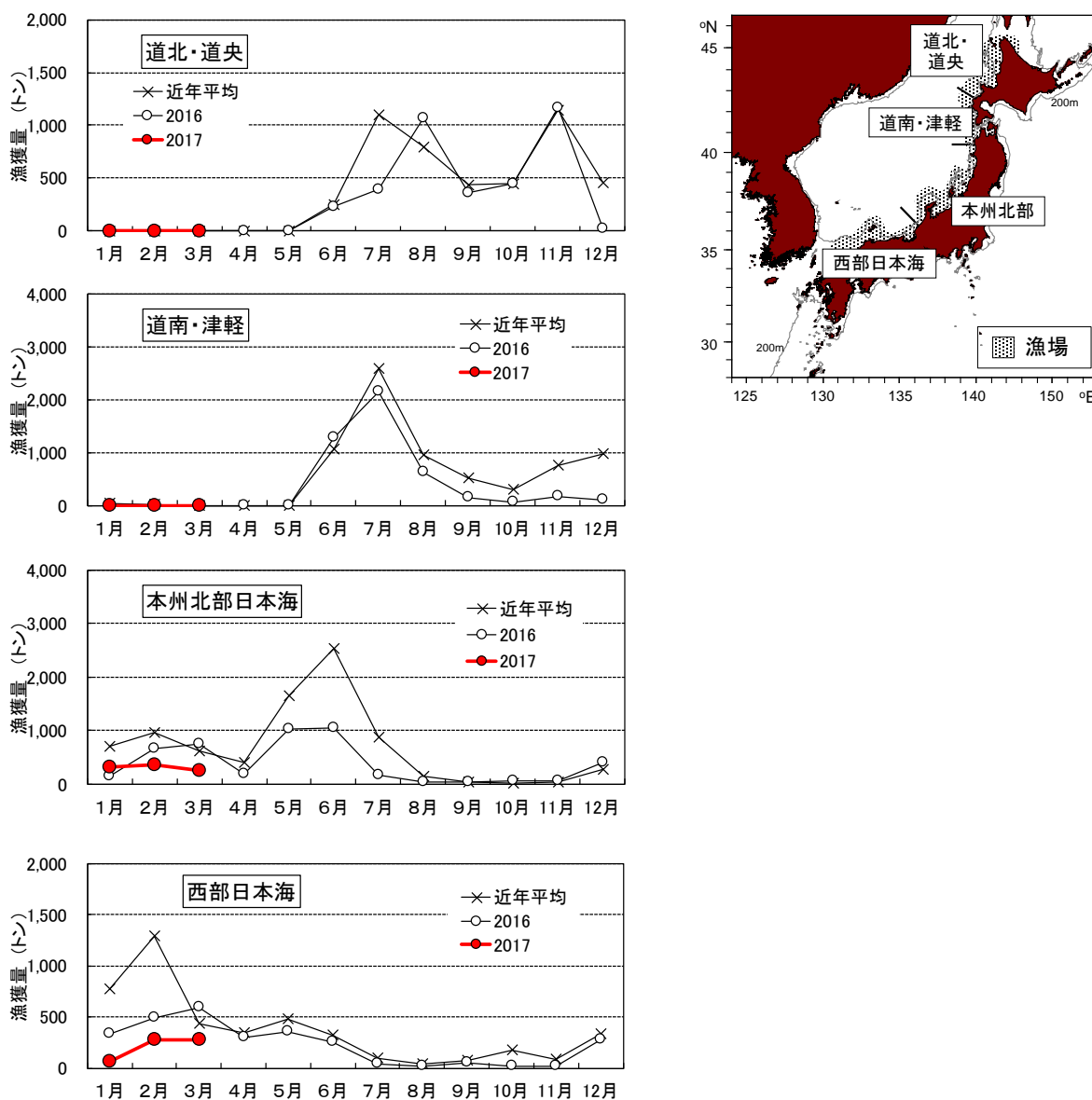


図5 日本海各海域における漁獲量（過去5年（2011年～2015年）平均、2016年および2017年）の経過
ただし、2017年の一部は未集計および速報値

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産試験場	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター (取りまとめ機関)
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所